

執筆者：住中 光夫  
システムリサーチ&  
コンサルト株式会社  
代表取締役

マイクロソフト社のセミナーでは、多数の講師陣の中から3回連続で受講者より1の評価を受けている。企業研修、書籍の執筆など、Officeソフトにかかわる多方面で活躍中。www.suminaka.comも要チェック!



特別連載

知って納得! 第10回

# Office活用セミナー

マイクロソフト社セミナーで大人気! Office指南のカリスマ・住中先生が、パソコンをビジネスに活かすための心構えをわかりやすく解説する!!

情報加工に知恵と手を加えることが

ビジネスを強くする!!

コンピュータが  
ビジネス力を弱くした

コンピュータシステムは、正確性やスピード性を求め、全自動でデータ処理を行なうことを目標にして進化してきました。実はこの全自動化が、ある面日本ビジネス力を弱くし、不況を加速した要因のひとつであると思われまふ。

古来より人はいろいろな経験を蓄積し、その経験の中から新たなアイデアや創造を行なってきました。しかし現在では、いろいろな業務や仕事がコンピュータ化され、ブラックボックスの中の全自動システムが「ある結果」を表示します。その「結果」がどのようなプロセスで出てきたのか、あるいはどのような生い立ちで生じたのかは、見る人にはわかりません。そこには個人の経験は必要なく、その結果を見て行動を起こすことが求められました。

そのために、ビジネスの中で

ひとり一人の経験力や想像力が退化し、工夫する力さえ弱くなってきています。

ある書店の社長が言います。「最近はこの店の品揃えがワンパターンになり、魅力が薄れている。その要因はPOSである」

過去の書店では、本の売り上げ時に売上カードというしおりを抜き、閉店後その売上カードを、出版社ごとに並べなおして集計し発注していました。そんな時に「あつ、こんな学術書が売れている」と気づき、その品揃えが意識的に行なわれていました。

しかし現在は、POSによりベストテン集計資料が自動的に印刷されます。そこでは、その細かい売上動向はあまり見られないことに発注が行なわれます。その時には、経験も創造性もなくても、とりあえずの仕事ができるのです。しかし、魅力ある品揃えはなかなか期待出来ません。

Officeソフトは、知恵を加えて使うもの

Officeソフトは、多くの場合、全自動ではありません。ひとつのグラフを、ひとつの文章を作成するのに、その人の知恵と経験が必要になります。

部下に資料を作成させて会議に出席する上司がいます。その上司は、その資料の中の数字を問われても答えることはできません。その数字が出た経緯や背景がわからないからです。

Excelなどで自分でデータを分析し、表やグラフをあこれ作成する。その中から表やグ

ラフを2つ3つ会議用の資料として利用すれば、その裏にあるデータも頭にある会議の発表ができます。

21世紀のビジネスで必要な力は、経験や勘と、情報加工ができる力です。そして業務処理のように全自動化すべきことと、データ分析のように経験と知恵を加えてその裏にあるものを探り出すことを、分けて考える必要があります。

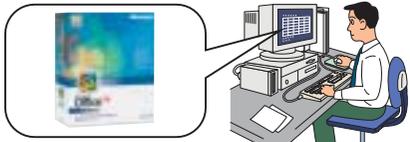
Officeソフトを利用すれば、低コストでかつ効果のある情報加工や活用を行なえるのです。

## 全自動から、知恵と手を加える活用と加工へ

全自動の作り込みシステム

高額な投資が必要  
一定の決まった業務  
集計などの処理が目的

情報作成・加工・伝達に手と知恵を加える



高性能な出来合製品を利用  
低コストな情報活用  
多様な業務での利用が可能  
人の知識や知恵を向上